

日本文学全集
54

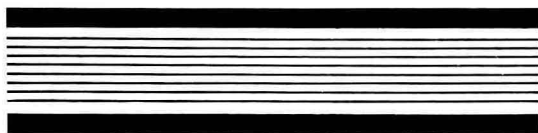
有吉佐和子・瀬戸内晴美
河野多恵子

助左衛門四代記

夏の終り・雉子・墓の見える道・蘭を焼く・他
不意の声・幼児狩り・蟹・最後の時

河出書房

有吉佐和子・瀬戸内晴美・河野多恵子



カラー版日本文学全集 54

1971 ©

昭和四十六年八月二十日 初版印刷
昭和四十六年八月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者

有吉佐和子
瀬戸内晴美
河野多恵子

発行者

中島隆之

印刷者

草刈龍平

装幀者

亀倉雄策

本文印刷

中央精版印刷株式会社

口絵印刷

凸版印刷株式会社

製本

加藤製本株式会社

製函

加藤製函印刷株式会社

本文用紙

本州製紙株式会社

クロース

日本クロース工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

0393-331154-0961

目次

有吉佐和子

助左衛門四代記

五

瀬戸内晴美

あふれるもの

一三七

夏の終り

一五一

雉子

一四〇

樹の幻

一八一

墓の見える道

一〇三

蘭を焼く

二二八

有吉佐和子

助左衛門四代記

宝永四年（一七〇七）十月四日、関東関西を揺がす大地震があった。富士の宝永山は、このとき出来たものである。紀州に於ても、海岸線は大津波に襲われた。海士郡木ノ本は辛うじて津波は免れたが、家屋が倒壊した上に大火を発生し、地主小作の別なく焼出されたと伝えられている。当時この辺りきつての大地主であり、後に庄屋ともなった垣内家の系図書も、この災厄によつて、焼失してしまつた。垣内家ばかりでなく、木ノ本の神社その他にも、それ以前の古文書を見る事ができないのは、このためである。

が、宝永四年以前の垣内家の系図については、紀伊統風土記や大家頭の控および根来寺関係の文書から、垣内家の先祖は源左衛門入道道晃と云つて、建武の頃（一三三六）まで沖の城の城主湯浅権守の付属の者であつたが、その後木ノ本に住みついて百姓をしていたということが分つてゐる。

湯浅権守は、平家物語にも出てくる湯浅宗重のことで、この子孫一族は今の和歌山県有田郡を本拠として大勢力を持っていたから、おそらく木ノ本もその領地であつたのだらう。紀伊統風土記の木本村「塩たき地蔵」の項に現われる地頭の竹内源左衛門入道は、おそらく先に述べた源左衛門入道と同一人物であるに違ひない。

湯浅党の衰退後、時を経て木ノ本を支配したのは根来寺で、同寺が豊臣秀吉によつて攻略された天正十三年（一五八五）三月まで、同寺の所領であつた。その間、根来寺の役僧の領内巡視に際し、海士郡でその休憩所に当てられていたのが垣内家であつた。なんらかの末端の役仕事を分担し、特権も与えられていたらしく、そういう家々には院号が与えられていたようであり、垣内家に関しては、寛永五年（一六二八）の文書「大家頭の控」に、寛永三年（一六二六）三月、垣内正福院が根来百人衆の一人として和歌山城の大広間で初代藩主徳川頼宣（南竜院）公に御目見得し、従来院号はそのまま使用しても差支えないというお言葉を賜つたと記されている。

今でも木ノ本で垣内家をしようくいと呼んでいるのは、正福院が訛つたものである。

しかしながら、垣内正福院の蔵の中にある古文書は、前述したように宝永四年以降のものであるから、代々の戸主が助左衛門を襲うようになったのが、それ以前からの習慣かどうか詳らかでない。が、ともかく宝永以降、最初に現われる助左衛門を、初代助左衛門として、この稿を進めることにしたいと思う。

筆者は、この助左衛門の末裔であつて、初代から数えるなら、六代目の当主になる者であるが、筆者の父が助左衛門を襲名しなかつたために、表題は助左衛門四代記としたのである。筆者自身については、垣内家の終焉に登場するまで、自らを語ることは避けたい。

一九六二年春 垣内二郎 識

助左衛門四代記 序章

「えらいこっちゃったのう」

「ほんまによオ。えらいこっちゃったわア」

本ノ本の人々は長い間こういう語りかけを挨拶がわりにしていた。言葉通り、大変事の後なのであった。宝永の大震災は、しよくいの家屋敷まで灰にしてしまった。本ノ本の復旧工事は、村人を挙げて、最初にしよくいの家を再建することであった。

しよくいの家内家は、村の名寄帳（土地台帳）には所持高百石余と記されていて、当時貴志組の大庄屋であった高橋重太夫とは何らかの姻戚関係を持つ、この地方の名家であった。当代の主の名は文右衛門。彼は震災のあと、本木村一村の人々を一カ所に集め、

「高持ちは自分が山から木伐つて家建てよ。年貢は儂が願うて向う一年がとこ御免を頂こう。小前は材木足らん分、儂が山へ入つて伐れエ。年貢のことは、儂がようやるよつて安心せエ。弱百姓は、儂が山から木伐つて、ともかく屋根と柱は造るがええ。よしか」と申し渡した。

本ノ本の村庄屋は本木太兵衛といったが、震災に梁の下敷きになって死んでいたので、役付きではないが文右衛門が一存で計らったのである。

本ノ本の住民は、神主僧侶の他は農民であり、大工その他の職を持つ者もあったが、いずれも農民の副業であった。この農民を大別すると自作農と小作農になり、前者を高持ちと云い、その貧しいものは小前と呼んだ。小作農を一名水呑み百姓とも弱百姓とも云ったのである。

それらの人々に、垣内文右衛門は私財を投じて家屋を復旧させたのであるから、村人はこれに感動して、一応雨露のしのびるほどの家を建てる、誰からとなく呼応しあって、しよくいの家屋敷の再建に

かかったのであった。それが宝永六年の秋である。震災から既に二年の歳月が流れていて、年貢米の免除は文右衛門の云う通りになっていたため、村には普通りの裕福な気分が充ち溢れていた。田には黄金の穂りがひろがり、家々の垣根に芙蓉が朝から鮮やかに白く咲き、日中は花を淡紅色に染めていた。

「えらいこっちゃったのオ」

「ほんまに、えらいこっちゃったわよオ」

村人たちは、刈入れまでの手の空いた時期を、各戸一人ずつしよくい再建に出かけてきた。垣内家の持山は、村に近いものはすっかり丸裸にされていたから、大黒柱や梁や棟木にする材木は、奥の奥山から伐つて運ばねばならなかった。前蔵三つが無事であったから、村人はそれによって飢えから守られたのであった。その蔵も、しかしかなり傷んでいて修復を必要としていた。母屋の建坪は百二十坪、平屋であるから出来上りは広大なものになった。もっとも着工から竣工までには、五年かかって、年貢は宝永から正徳に変っている。

が、この間に変ったのは年号ばかりではなかった。正徳三年、文右衛門は妻の妙との間につくった男二人、女三人の子供のうち長男助右衛門を失っている。

それはもう母屋の総体に形がついて、天井や廻り廊下に板を張る作業が、もう幾日か続いている、やはり秋の出来事であった。文右衛門は、朝からひどく機嫌が悪く、それはどうやら昨夜の貴志組の寄合で、自分だけ役付きでないのを他村の庄屋連中から、それとなく白眼視されていたのを思い出していたからであるらしかった。文右衛門は剛胆で、思いやり深く、細事に拘泥らない風格を遂に晩年まで持した人であるが、それを繕う蔭の職寄せは、常に妻の妙の役目になった。文右衛門は、朝食の膳で、箱膳の前に正坐して並びながら、末息子子の助左衛門が奥で泣き喚くの顔をしかめ、

「吾が子を、ようあない泣かしていられるなあ。心の剛い奴ちゃ」と、妙を罵ったのだ。

妙は、夫の意見に口出したこともなく、叱られても云い返したことの無い従順な妻であつたから、箸を置いてすぐ奥に立つたが、内心では納まっていなかった。幼な児が泣くのは当り前だ、と彼女は邪慳に助左衛門を抱きあげて、ゆすりながら夫への口に出せない不満を胸の中でくすぶらせた。口に出せないから燃るのであつた。

文右衛門は、その日は、貴志組の杖突（書記）と相談事があるので、早昼食を撰って出かける必要があつたのだが、助左衛門の泣き声がすっかり癪にさわたつたのと、それをなだめに行つた妙がいままでたつても朝食の座に戻つて来ないので、一層腹を立てて、その日の予定を妙に云うのを忘れてしまつた。長男の助右衛門が五歳の幼さで、すぐ目の前の箱膳に行儀よく坐っているのまで目障りになつて、食事が済むと子供に声もかけずに、ぶいとして行つてしまつた。家の中は、新しい木組木材から芳しい木の香が香り立つて、その分落着かないのもあつた。

だから出かける前になつて、文右衛門はまた声を荒らげて妙を叱ることになつたのである。

「飯喰わさんと儂を出す氣か、やい」

「ああ、済まんこととございましたよし」

妙は慌てて厨房へ走つた。昼から外出をするということは聞いていなかったし、早昼食の用意をしると云いつけられたわけでもない。だのに習性で反射的に詫びてから、妙は厨に飛び込んだのである。女衆たちは、まだ食事の支度の時間には遠いから、女衆部屋にもいず、おそらく裏の棉晶にでも出ているのであらう。妙は、自分一人で夫の食膳を整えなければならなかつた。もはや、米を磨いでいたの間には間に合わない、咄嗟に彼女は松茸を刻み、出汁雑魚を碎いて、醬油で味つけて火にかけ、煮立つたところへ朝の残りの冷飯を足して、即製の炊き込みで松茸飯を整えたのであつた。

早手間に造つただけに、膳の上の秋の香りは見事なものであつたが、文右衛門は外出のことに心が飛んでいて、味うどころでなく、

膳の横には今朝起き抜けに机に向つて書いた願文を展げて、それを咀嚼するように幾度も読み返しながら、松茸飯を掻込んでいた。

願ひ上げ奉る口上

私儀以前より当村庄屋の空席につき有難き御沙汰を待つこと久しく候へども、長く榎原村庄屋楠見長右衛門に木本村の肝入を兼ねるやう仰せつけ下され候ところ、村内の事ども諸事滞りがちに候ま、書面を以て申上奉り候。なにとぞ、木本村の郷御蔵とも楠見長右衛門に退役仰せつけられ、跡役の儀は当村頭百姓のうち、お眼鏡をもつて仰せつけられ候やう、この段、早々御聞きずみのほど、ひとへに願ひ上げ奉り候。

大庄屋 高橋重太夫殿

木本村 垣内正福院 文右衛門

頭百姓というのは、自作農の高持ちの別称であつて、弱百姓の対語になつてゐる。木本村の頭百姓の中から、庄屋に選ばれる人柄を探すとすれば、読み書きが出来、資力があり、村民からの氣受けもよい者といへば、この願文を書いた当の文右衛門以外にはない筈であつた。昨夜来、彼はこの文案を練りに練りながら、こんなことを自分自身でやらなければならぬことにひどく腹を立てていた。本来から云へば、榎原の楠見長右衛門が文右衛門を木本村庄屋に推薦すべきなのだ。あるいは、前庄屋の未亡人や、元の株庄屋の連中が、連名で彼を木本村の庄屋にすべく運動をするべきなのであつた。が、いつまでたつても誰も動き出さないとき、文右衛門は、自身でそれをしなければならぬのであつた。彼は所謂やり手という型の男であつたから、周囲の連中のやり方が悉く氣に入らず、周囲はまた文右衛門に怖れをなして手を出さないという悪循環が起つていたので。

貴志村まで歩くには、腹ごしらえを充分にしておかなければならなかつたから、文右衛門は黙々として松茸飯を掻込み、大きな湯呑み茶

碗を掴んでぐいと飲み干して、妙を勞いもせずに家を出た。後ろ姿は不機嫌のままであった。

玄関で手をついて夫を見送るまで、妙は一言も不満めいた口をきかなかったし、表情にもそれを出さなかったのであるけれども、女衆もいない厨房に膳を下げて降りたときには、面立ちが峻しく変相していた。このところ文右衛門の不機嫌が続いて、それが悉く妙にだけ発散されているとき、妙は自分の内奥に鬱積するものにそろそろ耐えられなくなっていたのであったろう。その上、この日は妙自身も妙にこじれていた。虫の居どころが悪いというのは、こういうことを云うのかもしれない。

流しに降り立って、妙は銅の手桶に、大甕から、銅の大きな柄杓を使って水を張った。水仕事をして、文右衛門の食器を片すのは、女衆がいても必ず妙が自分の手でやる習慣であった。そういう生活の端々が身近な人々を感じ入らせて、しょうぐいの御っさんは、よう出来たお方やと人々は噂している。文右衛門のような切れものに、あれ以上の御っさんはあるまいとも云われている。

銅の手桶も、銅の柄杓も、宝永の震災で焼跡から拾い出してきたものであった。この、木の香の匂う造作中の家の中で、昔々から垣内家に伝わる数少ないものの一つが、この水仕事の道具なのであった。昔のものであるだけ、柄杓も重くて、瓶の水を汲むにも片手では難かしかった。妙は、ようやく水を張った手桶に、文右衛門の茶碗と湯呑みと小皿と箸を入れ、町噺に一つ一つ洗い出した。茶碗の底にこびりついていた松茸の切端が、いつか洗われて手桶の中に浮いたとき、妙はしばらく動かずにそれを見ていた。文右衛門の怒りの前で、急いで松茸を刻んだときのことを思い出していたのであった。奥から、また助左衛門の泣き声が聞えてくる。妙は、いらいらとしていた。

そのときであった。厨の入口に鈴の音がきこえ、朗々と御詠歌が聞えてきたのだ。

慈尊院、粉河寺、紀三井寺を持つ紀州で、巡礼姿を見ることは木ノ

本でも珍しいことではなかった。菅笠の下に頭髮も白布で掩い、白衣に手甲脚絆にいたるまで悉く白一色の木綿で身固めした巡礼たちは、家々の軒に立って御詠歌を詠じ、鈴を振って、応分の喜捨を受けるのである。巡礼の人々には、夫婦で連立っているものもあり、親が幼い子の手をひいているものもあったが、この日、垣内家の厨房の前に立ったのは、小柄な一人の老人であった。右手に鈴を振り、左手には塔婆型に刻んだ杖と白い犬を曳いていた。御詠歌を詠じる声は、美声というのではなかったが、枯れて通って、しみじみとしたいい声であった。

ふだらくや、きしうつなみは、みくまの、なちの、おやまに、ひびくたきつせ。

ふるさとを、はるばるここに、きみあでら、はなの、みやこも、ちかくなるらん。

ちちははの、めぐみもふかき、こかはでら、ほとけのちかひ、たの、もののみや。

大和節の悠長な詠じ方を耳にしながら妙は相変らずいらとしていた。米櫃のところまで行って、米をとってくるのが億劫であったし、神経の立っているときには御詠歌の間伸びした調子さえも痛に障った。放っておけば、巡礼は悪く物をねだることがない。やがて諦めて行ってしまうだろう。妙は知らぬ顔で、手桶の水を空け、柄杓をとって濯ぎ水を大甕から汲んだ。そのとき、巡礼の犬が、ずっと音もななく妙の傍に寄ってきたのだ。

「ひやっ」

犬嫌いの妙は思わず声をあげて、飛退くはずみに持っていた柄杓を投げた。銅の柄杓は、もろに白犬の眉間に当り、当りどころが悪かったのだらうか、犬はきやんツきやんツと二度ばかり啼いてキリキリと

舞うと、こもりと土間に斃れて動かなかった。

御詠歌は止み、巡礼の老爺は厨に転がり込んで犬を抱き上げた。

「白ッ、白ッ、白ッ」

老爺は犬の名を呼んで揺さぶったが、犬は眼から血を噴いて、動かなかった。

茫然と立ち尽している妙に、老爺は黄色い眼を剝いて嗅いた。

「ようも白を殺しくさったな。覚えとれ、頭陀行のものに災いした上、殺生戒を犯した仏罰は靦^{めづ}るじやあ。この家に七代まで祟^{たたか}ってやる。よう覚えてくされッ」

白犬を抱えた老人は、そのまま背を向けて家を出て行つてしまった。彼の白衣の背に、墨書した南無大慈大悲観世音菩薩の文字群が、怒りに狂つて動き乱れて見えた。

厨房の一角で起つたこの事件は、幸い誰の目にも止らなかったようである。昼食の用意の時間が来て、女衆たちは厨に戻ってきたが、

「まあ御^ごっさん、旦那^{だんな}さんは早昼食でお出かけかのし。畠^{はな}に出ていて氣^きつきませなんだよし」

声をかけて、ようやく着^きざめている妙に氣がついたが、何事が起つたかを推察することはできなかった。

妙は、もちろん殺す氣があつて犬に柄杓を投げたのではなかったけれども、この後味の悪さは文右衛門に当り散らされるのとは比較にならなかった。綱吉將軍が発令した生類憐^{れん}みの令すなわち殺生禁令は、数年前に廢されていだけれども、お犬さまを尊ぶ思想は貞享四年から宝永六年までの二十二年間に民間信仰を育ててしまつていたから、妙は犬殺しを普通りの重罪と心に深く咎^{とが}めていたのであった。無氣味に白く、斑点一つない犬であつたのが忘れようとしても忘れられず、この家に七代まで祟^{たたか}ってやると喚いた巡礼の顔も、眼を瞑^みつても視界から消すことができなかった。

「水、水を頂かして」

妙がようやく云うと、女衆は素早く土間に落ちていた柄杓を拾い、

それを濯いで水を汲んだ。犬を殺した柄杓で汲んだ水は、妙は飲むことができず、

「結構え、自分で汲みますわ」

訝しい顔をする女衆を残して、井戸端へ出た。

からからと釣瓶の音を立てて、深い井戸から水を汲みあげ、それに口をつけようとしたとき、俄かに玄関が騒がしくなった。

「ほんぼんが……」

「ひゃあ。ほんぼん……」

「火が、風が」

「ほんぼん……」

「御っさん、御っさん。居なさらんか」

妙は異変が、長男の助右衛門の上にあつたことを咄^{はな}嘩に感じとつて、釣瓶から手を離れた。薄暗い厨を通りぬけて玄関へ走る彼女の背後で、どぼんと鈍く釣瓶が井戸の底に落ちた音が聞えた。

「御っさん、ああ、御っさん」

妙の顔を見て、玄関にどやどやと入ってきた一群の一人が声をあげた。

「どないして、え」

「ほんぼんが、火浴びて」

「ええッ」

五つになる長男の助右衛門は、大工仕事をしている小作人たちの間を、ちよろちよろと走りまわつて遊んでいたのがあつたが、鈍屑や板切れを庭の一角で燃やしているのに目をつけると、いつかその傍から離れなくなった。折から、表座敷の回廊の仕上げにかかつていた人々は、子供に目をくれる暇はなかったし、助右衛門は惣領らしく温和しい子供であつたから、自分からも人の関心を惹かなかつた。ただ、思いついたように、木切れを拾いにくいては火に投げて、焰を大きくすることに興味を持って一人で遊んでいたのである。温暖の地である紀州の人々は、北国の人々のように焚火という習慣を身近く持たなかつた。

た。垣内正福院の庭先には秋が深まっていたけれども、働いている人は額にも牀にも汗を流しているほどで、暖をとる必要はまだなかった。だから、人々は焚火の火が大きくなったことに、つい注意を払わなかったのであったろう。

「きゃあッ」

子供の悲鳴で、人々は手を止め、声のあがった方を見て、仰天した。大きな焚火の真ん中に、垣内正福院の跡とり息子が転がっている。鉋も鋸も放り出して、人々は助右衛門を火の中から救い出したが、上半身正面は焰になめられたあとで、手も足も赤く焼けて皮膚は破れ崩れていた。焚火の中心は大きな木材で櫓が組んであったから、何かで足をとられて火の中へ倒れた子供は、焰を牀で消すこともできなかったのであろう。

妙が、助右衛門を見たとき、もう彼は虫の息で、苦しいとも云わなかった。かすかに頭が嫌々をするように悶え動いて、その度にか細い喉首が長く伸びてはよじれた。手のほどこしようなひどい火傷であった。が、妙はとりあえず焼けた綿木綿の着物を、こざっぱりしたものに着替えさすことで、自分も冷静さを取戻そうとした。

「いろいろたら、あかんで、御っさん」

男衆の一人が声をかけて、妙の手を止めた。

「種油や、菜種油がええ」

「そろりも火傷の妙薬やしてよし」

「持って来い、持って来い」

「いいや、油が先や、先や」

男衆たちが、助右衛門の牀に種油を、顔と云わず、胸許と云わず、手にも足にも塗りつけた。赤く爛れた助右衛門の顔が、てらてらと光り出すのを、妙は放心して眺めていた。嘆き悲しむなどという親心の余裕も失っていたのであった。耳の奥から、この家に七代まで祟ってやる、と云った巡礼の老人の声が聞えてくる。火傷に歪んだ助右衛門の顔の向うに、老人の皺だらけの顔が見えた。この家に七代まで祟っ

てやる。この家に七代まで祟ってやる。

跡取り息子を失うというのは、家の二代目にケチがついたということであった。白犬の祟りが、その日のうちに顕われたのかと思うと、妙は犯した罪の怖ろしさに身動きもならないのであった。

助右衛門の災難に居あわせた人々は、男衆女衆の別なく集まって来ていたが、古屋村の医者を持たずにぼんぼんの命は亡いのものと例外なく思っていた。かなわぬときの神だのみだと、西手の木本八幡宮に跣足参りに駆け出す女衆があり、年寄の小作人は黙々と塩たき地蔵にお百度を踏みに行った。

垣内文右衛門が日暮れて正福院に帰ったときには、どの手当ても空しく、長男の助右衛門は亡骸となつて奥の仏間に横たわっていた。白布で掩われた小さな仏の足許には、妙が、虚脱したように表情のない顔で、坐っていて、文右衛門を出迎えに玄関まで立たぬどころか、彼が仏間に入つて来ても、手をついて頭を下げる礼儀も思いつかないようであった。

「お妙、どないしてん」

文右衛門は、怒気を含んで話しかけた。貴志村まで迎えに来た者の口から、事の次第は聞いていたけれども、この場合、放心している彼女をどやして、しっかりさせる必要もあるのであったし、子供を失った悲しみは、咄嗟に誰に向けようもない怒りに変質していたから、いつの場合もそうであるように、文右衛門は妻の妙にそれをぶつけようとしたのであった。

「……………」

「お妙」

「……………」

「お妙、聞えんのか」

文右衛門は、やにわに妙の肩を掴んで、彼女の魂まで揺さぶるほど荒々しく、

「どないしてん」

と訊いた。

ひいという奇妙な音が、妙の喉から洩れて出た。

「白犬が来ます。ぼんぼんが、あれ、こぼんも危ない。あぶない、あぶない」

日頃の妙の声音を知る者なら、慄然とするほど、うわずった現ない声であった。

「お妙、これ」

「白犬が、厨から上ってきた。それ、そこへ上ってきた。ぼんぼんを噛もうとでな。噛むなら、私を噛みなされ。ああ彼方へ行たらいかん、いかん、いかと云うにッ」

完全に狂気した声であった。

「お妙」

「……………」

「しっかりせんか」

「……………」

「お妙、狂うなッ」

文右衛門の掌が飛び、びしりッと妙の頬が鳴った。

「あッ」

妙の姿勢が崩れ、打たれた頬に手が行ったのは、痛さを感じる正気の間が戻って来たことを示していた。

「お妙」

「ああ旦那さん」

妙は文右衛門を認めると、急いで居すまいを正して手を突いた。

「お帰りなさいませ。相すまんことを致しました」

「災難やったな。焚火やて」

「はい。私は水場におりまして目離してましたんよし」

文右衛門は端坐して、仏に掛けた白布を剥いだ。燈明の光の中で、助右衛門の屍は仄かに浮び上った。文右衛門は、長男の遺体に、しばらく合掌してから、助右衛門の顔をのぞきこんだ。五歳の長男は、

右の眼だけ薄くあけていた。文右衛門は、手をのばし、指先でそれを覗かせようと臉を軽く撫でたが、手についたものに驚いて、それを燈明の明りですかししてみた。

「もろみやしてよし、旦那さん」

男衆が後ろから説明した。菜種油を塗ったあと、息の絶えた助右衛門の体には動揺した人々の手でまたもろみが塗られたのだ。もろみというのは云うまでもなく醬油の素になるものである。醬油を絞る前の麦も豆もどろどろしている状態のものを、そのまま掌に掬って助右衛門の顔にいわず手足にすりこんだものだから、夕暮れて医者から手放されてようやく湯灌した後も、眼のふちに挟まったものは取り除けなかったであろう。それが、文右衛門の眼に、息子が片眼をあけていると見えたのであった。

「もろみか」

文右衛門は慄然として、懷ろから畳んだ晒の手拭を取り出し、指先を拭った。

秋風が、家の中に浸み入っていた。温暖な紀州でも秋の夜風は冷たい。文右衛門も、妙も、羽織を着ることも思いつかず、肩をすくめたまま悄然として、いつまでも仏間を動かなかった。

い、う、く、いの御っさんが、遍路さんの連れた白犬を殺したんやと。その祟りで、ぼんぼんが火に焼かれた。七代まで祟ると云うたんやと。

遍路さんの白犬を殺した祟りで、い、う、く、いのぼんぼんが焚火に転けたんやと。七代まで祟ってやると巡礼は云うたんやと。

い、う、く、いは、七代まで白犬の祟りを受けるんやと。

間もなく、誰からとなく、こういう噂がたつて木ノ本の村一帯にひろまっていた。白犬が死んだとき、厨には巡礼の老人と妙以外には人が居なかった筈であるのに、老人が呪いの言葉を吐いたのを聞いた女衆がいたのであろうか。垣内家の裏口から、白衣の巡礼が、眼から血

を噴いた白犬を抱いて出て行ったのを見かけた村人があったのかもしれない。あるいは、怒りに狂った老人は、村を出る道すがらに出会った人々に事の経緯を詳らかに述べて、呪いの言葉を吐き散らしたのかもしれない。

文右衛門に頼柄を張られて一時正氣に返ったかに見えた妙は、その後氣鬱病にかかったのか、一層口数の少ない女になってしまっていた。妙は、厨で起った出来事は、夫である文右衛門には告げなかった。

文右衛門自身がその噂を耳にしたのは、助右衛門の野辺送りが終わってからである。初七日に、正福院の西隣にある西勝寺から戻って来た文右衛門は、女衆に塩を撒かせてから玄関に上り、それからしばらく、懷ろ手をして庭を見渡していた。

「白犬か」

彼は呟いた。もうしばらくしたら、小作人たちが小作米を俵に詰め積上げて、埋めてしまふ広い庭だ。それが、雑草の芽もなく美しく地固めされてあった。薄暮の中で、平らな土が白っぽく浮び上っていた。造作の作業は、不幸があつてからしばらく休んでいたの、庭には木っ端一つ鉋屑一つ落ちていない。

「七代まで祟るてかい」

文右衛門は、また呟いた。七代——彼はそれが年数にすれば二百年ほどのものになると考えつくと、かすかに肩を揺すって笑った。

「どないに祟つても、や」

と、彼は考えた。

「七代まで代が続くなら、この家が二百年は栄えるというこっちゃないか」

助左衛門の泣き声が、奥の間から聞えてきた。竈の立っているとき、これほど竈に障る泣き声はなかったのに、今日の文右衛門は次男の泣き声を快く聴いていた。

「あのかい盛大に泣く子なら、強うに育つやわい。助右衛門が死んだ

というても、しょうくいの跡つぎが無うなったわけやない。助左衛門がいる。泣け、泣け、盛大に泣けよ、助左衛門」

文右衛門は、助左衛門の泣き喚く声を、心の中で励まし続けていた。彼は知っていたのだ。やり手で、やり過ぎで、煙たがられていた文右衛門にも、息子を急に失ったときけば、同情する者も出てくるに違いないのを、文右衛門は知っていたのだ。その同情心の間隙に、文右衛門の政治力は必ず這い込むことができる。そう彼は確信していた。

第一章

一

初代助左衛門は、十八歳で、妻を娶っている。垣内家の当主文右衛門は五十二歳で、この婚礼は謂わば彼の最盛期のものではあった。助左衛門は末息であつたし、三人の姉はそれぞれ海士郡磯脇村の村庄屋、榎原村の肝入、および西名草郡の梅原村の納庄屋に嫁いでいて、それは貴志組に属する十九カ村の中でも名家と呼ばれている家々であつた。文右衛門の政治力はこの十数年の間に、自らを木本村の村庄屋にしたばかりでなく、自分の娘たちを名家に嫁入らせることで、海士郡、西名草郡を統轄する貴志組の中では自分の勢力を強めていたのであつた。だから助左衛門の婚礼には、貴志組に属する村々の村庄屋、納庄屋、肝入などの面々が統々と祝儀に出かけてきた。それでなくても数年前に検約令は廃され、その年には参観交代の制度も豪勢なものに戻っているという、華美に流れる世の中であつたから、垣内正福院の婚儀は、しばらくその辺りの話題となるほど盛大なものであつた。村中の百姓たちに正福院から法被が配られたなどということは、おそらくその前にもなかったことであらう。高持ちには柿茶色の法被、小前には藍、弱百姓には薄藍の法被を配り、それぞれ背に大きく垣内

家の紋章である右三巴を白抜きしてある。それは村を挙げて村庄屋の家の婚儀を祝えという命令であると同時に、他村から集まる人々に如何にも垣内家には男衆が多いということを示そうとする文右衛門らしい演出であった。頭百姓の中には、この文右衛門の策略を見抜いて、「ふん、誰が着るかれ、こんなもん」

土間に抛り投げた木本忠左衛門などがいた。宝永の震災で死んだ木本太兵衛の遺児である彼は、それだけでなく文右衛門を目の敵にしてい、いつか村庄屋の役目を自分の家に取戻したいと考えていた。しかし、院号を持たない木本家では、家格の点でも正福院とは張り合い難かった。

「見てみい、今にこの家から、大庄屋を出してやるのじや」

忠左衛門は、口惜しそうに、そう嘯きながら、家の者に木瓜の紋のある紋付袴を整えさせた。どう毒づいてみても、婚礼には出向かないわけにはいかなかったのである。

大庄屋というのは、貴志組を統轄する家のことであり、十九力村の村庄屋を押えている、組で最高の位を持つ家であった。そして今、垣内正福院では、その大庄屋である貴志市左衛門の次女妙を、助左衛門の嫁に迎えようとしていた。

文右衛門の妻と同名の女を娶るというのも因縁であったかもしれない。貴志中から木ノ本まで、輿に乗り、梅原街道を一昼夜がかりで行列を練って嫁入ってきた妙は、助左衛門より一歳年上の十九歳であった。当時としては、決して若いとは云えない嫁御寮だったが、文右衛門にとっては、そういうことはどうでもよかった。彼にとっては、大庄屋の貴志市左衛門の娘が、自分の後継ぎの嫁になるということが一番大切なことなのであった。でなくて、どここの家から、このくらい盛大な行列を送り出すことが出来ただろう、と彼は思っていた。七吊りの荷を運び込むような嫁入りは、木ノ本始まって以来なのだ、と彼は誇らしく一行を出迎えた。文右衛門自身は、同じ村の頭百姓の中から自分の妻を娶っていたので、それにはこのような栄光の想い出はなかつた。

った。

「どうじゃ、助左衛門」

文右衛門は、息子と喜びを分つというより、息子にも誇りたいという欲望を抑えて、口の中でうやうやしく呟っていた。彼にとっては、助左衛門と妙の婚礼は、貴志市左衛門と垣内正福院の縁組なのであった。

そこで祝儀の客たちは、両家の縁組を祝うというより、敬意を表するために木本村の垣内家の奥の広座敷に居並んでいるといった方が正しかった。この辺りの習慣通り、披露の宴席には男ばかりが招かれていた。その殆どが苗字帯刀を許されている者どもである。垣内家の親類縁者は肩身狭く末座に控えて、あれよ、あれよ、と正福院の栄光を見守っていた。とりわけ鬱々としていたのは文右衛門の妻である妙の実家方である。

妙は、嫁を迎えたこの日から、いふく、いの大御さんと呼ばれる筈であったが、この日の宴席には顔を出していなかった。長男が死んで以来十七年、彼女は家の北側にある納戸の横の一部屋に籠ったきりで、ずっと人交わりをしていないのである。見たところは常人と変わらないのだけれども、どこか時折現なくなることがあり、話が長くなれば狂っているのが分った。当の妙自身も、そういう自分に怯えていて、人に対するときは一層臆病になっていた。とりわけ夫の文右衛門に会うと、びくつと牀中の神経を立ててしまわらしく、声も氣もうわずって、後退りするのである。

文右衛門は、そういう妻のいることを、他人には苦笑してみせていたが、心中は苦々しく思っていたに違ひなく、この十年ばかりは病妻を見舞うこともしなくなっていた。昔のように思うようにならないことがあって、その気晴らしの相手に妙を必要としたというようないことは、この十年ほどは無かったからだと言ってもよい。この日の婚礼でも分るように、垣内文右衛門は欠けたものない想いにあるのであった。

花婿の助左衛門は、綿帽子を冠った嫁御寮の横で、早くも、家内喜

多留の酒に酔って顔を赤くしていた。親譲りの肩幅の広いがっしりした体つきの彼は、気性も文右衛門によく似ていて、強く、十八歳の若さでもすでに木本村の肝入を勤めていた。肝入というのは肝煎の略字であって、文字通り色々と村人の世話をやく役目を持っていたに違いないのだが、村庄屋や納戸屋などと違って、選任は村民だけの意志に任されていたから、代官の承認は必要がなかった。だから、十八歳の助左衛門を肝入に任命したのは、村民の意志を代表した村庄屋の文右衛門に違いなかった。文右衛門は、助左衛門を垣内家の後とりとも、村庄屋の後継ぎともする心算があったのである。

助左衛門は、血気盛んな若者であったから、客の一人一人が文右衛門と貴志市左衛門の前で祝い言を述べ、それから、助左衛門にも献盃して座に戻るといふ蜿蜒とした宴席に、すぐ痺れを切らした。彼は、文右衛門に似ているといつても、父親より若いために少々正直であつたし、ごく単純なところもあつて、婚礼を家と家との縁結びと了解していても、やはり最大の関心事は自分の隣にひっそりと坐っている嫁御寮のことであつた。

文右衛門が貴志家に申入れて、それで整った縁談なのだから、助左衛門は勿論これまでに妙の顔は見たこともない。親の文右衛門自身も会っていないのであつた。貴志中と木ノ本とは西名草郡と海士郡と、属する郡も違ふほど遠く離れていたから、貴志家の妙といふ娘がどういふ女なのか、顔だちも性格も、噂も、きいていないのである。京の帯屋（呉服屋）に注文したといふ嫁入衣裳の話は聞いていたし、運び込む道具の数々も詳しく聞かされていたのに、肝心の花嫁についての知識は、彼は何一つ持ち合せていないのであつた。

真綿を薄く薄く伸ばした綿帽子は、文金高島田の裾からすっぽりと花嫁の顔を包んで、助左衛門に見えるのは綺羅びやかな補綴の袷元に仄かに匂う白い喉首だけであつた。

かねて文右衛門の口から、垣内家の繁栄が婚礼の最大の目的であることを云い含められていた助左衛門ではあつたが、祝い酒に酔うと十

八歳の青春は我慢の限界に來た。助左衛門は、宴席の正面に自分がいることも、自分の挙動は必ず客たちの注目を集めることも、その瞬間は忘れたのだ。

「あれッ」

花嫁が悲鳴をあげた。助左衛門は彼女が膝にのせていた手を荒々しく掴むと、自分の方に引き倒して、いきなり綿帽子に手をかけようとしたのである。

仲人が飛び出して、二人の間に割って入った。文右衛門も、貴志市左衛門も腰を浮かし、一座は騒然となつた。

仲人夫婦が花嫁花婿を、西側の奥座敷に送り込んだ後も、まだ白けている一座を見渡して、貴志市左衛門が、

「いやあ、頼もしい婚はんや。農らも覚えがありますかな」と云つて笑つた。

嫁御寮の親でもあり、大庄屋である彼の口から、こういう言葉が出たので、救われたのは文右衛門だけではなかつた。間もなく垣内家の広座敷は、婚礼の大盤振舞に相應しい賑やかさが溢ち溢れた。

あてがわれた法被を着た村人たちは、茶ノ間から玄關から厨まで一面に開け放った中で、これも振舞酒を四斗樽から自由に掬んで酔っていたが、この話をきくと、手を打って喜びあつた。

「男じゃ。それでなけりやよオ」

助左衛門は、この婚礼の席の不行儀で、思いがけず男をあげた。文右衛門の諸事大仰で形式的なやり方に、不満を持っていた人々は、そういう助左衛門に親しみと畏敬を同時に覚えたのであつた。

表座敷も、厨間も、家中が湧きたっている騒ぎが、納戸にも聞えない筈はなかつた。本来ならば裏で采配を振るべきであつた大御さんの妙は、この頃になつてようやく、ふらりふらりと北の部屋から出て來たのである。

「御っさんよオ、お芽出とうさんでございますウ」
妙の姿を認めた弱百姓の一人が、声をかけた。